

表現活動を通した総合的な保育実践力の育成プログラム —4年間の学びのプロセスから—

東村 知子 ・ 平井 恭子 ・ 古賀 松香
(京 都 教 育 大 学)

An Educational Program through Performance to Develop Student's Capability for Early
Childhood Education
— Focusing on Process of Learning for Four Years —

Tomoko HIGASHIMURA, Kyoko HIRAI, Matsuka KOGA

2018年11月30日受理

抄録： 本学幼児教育科では、学生の総合的な保育実践力を育てるために、人形劇や絵本の読み聞かせ、ミュージカルなどの表現活動を中心とする4年間のプログラムを作り上げてきた。本稿では、プログラムの概要と学生の学びについてまとめ、その意義と今後の課題について考察する。本プログラムの意義は、4年間で学生が多様な活動を経験でき、活動への参加のレベルが段階的に深まるようになっていくこと、どの活動もすべての表現分野を含んでいること、表現活動はすべて学内外の機関や学内行事、地域との連携のもとで行われているため、乳幼児から地域住民まで幅広い観客の前で演じる経験を積むことができ、結果として本学と教育現場や地域社会との結びつきを生み出し強化するものとなっていることである。

キーワード： 表現活動、保育実践力、育成プログラム、幼児教育専攻学生、学生の学び

I. はじめに

本稿では、学生の総合的な保育実践力を育てるために、本学幼児教育科で取り組んでいる1回生から4回生までの4年間のプログラムについて概要をまとめ、その意義と今後の課題について考察する。

保育者に求められる専門性は多岐にわたるが、その重要なものの1つに表現力がある。保育における表現は、音楽、造形、身体、言語の4分野にまたがる総合的なものである。通常の授業は分野ごとに分かれ、それぞれに必要な技術・知識を教えるものとなっている(表1)。

表1 各表現分野の授業科目^{注1)}

表現分野	科目名
音楽	音楽基礎、器楽、表現Ⅰ(保)、音楽教育指導法
造形	幼児造形、表現Ⅲ(保)
身体	表現Ⅱ(保)
言語	児童文学、言葉(保)

実際の保育においては、各分野の技術を総合して表現することが必要になる。そのため、幼児教育科では、幼児音楽教育ゼミの教員(平井)が中心となり、学生が日々の授業で学んだ知識や技術を乳幼児とその保護者、児童および地域住民の前で発揮できる実践の機会を作り出してきた。その4年間のプログラムをまとめたものが図1である。以下、本稿では図1に基づき、それぞれの活動の内容と学生の学びについて述べることにする。

II. 各活動の概要

実践力を育成する場として用意している学生の表現活動は、すべて学内外の機関や全学行事、地域との連携によるものであり、附属図書館と連携して行っているもの、附属学校園および地域の教育・保育機関と連携して行っているもの、全学行事の中で行っているもの、地域と連携して行っているもの、に分けられる（表2）。以下では、それぞれの活動の概要について順に述べる。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
行事等	うたとおはなしの会			附属幼稚園友会との共催イベント	オープンキャンパス			うたとおはなしの会	附属特別支援学校児童との交流		人権イベント出演 ・京都デルサ ・イオン高の店	人権イベント出演 ・木津川運動公園
	入学式			笠置ちびっこまつり				人権イベント出演 ・山科合同福祉センター ・京都府立植物園	墨染保育所 クリスマスイベント		笠置小学校 うたとおはなしの会	卒業式
	えほんのもり（通年 月2回）											
1 年生	会場準備・合唱 お土産づくり 造形コーナー			パネルシアター、人形劇など	お土産づくりなど			会場準備・合唱 お土産づくり	トーンチャイム演奏 （支援学校）			
	えほんのもり準備・読み聞かせ											
2 年生	入学式準備・歌				お土産づくりなど							
3 年生		ミュージカル準備	ミュージカル準備	ミュージカル上演	ミュージカル上演		うたとおはなしの会 運営（幼児音楽ゼミ）	人形劇、楽器演奏 など（墨染保育所）			人形劇、手遊び、 パネルシアター	卒業式準備・歌
	えほんのもり準備・指導【言葉（保）の授業】											
4 年生	運営（幼児音楽ゼミ） 人形劇、絵本、 手遊びなど				学科紹介スライド 作成・統括・発表			準備 人形劇、絵本、 手遊びなど	人形劇、楽器演奏 など（支援学校）			
全学年					会場設営・片付け お土産づくり 質問コーナー							

図1 4年間のプログラム

表2 活動と連携先

連携先等	活動（行事）	実施時期
附属図書館	うたとおはなしの会	4月、11（12）月
	えほんのもり	5月～翌年3月
附属学校園	附属幼稚園でのミュージカル上演	7月
	附属特別支援学校児童との交流	12月
地域の保育所・小学校	墨染保育所でのクリスマスイベント	12月
	笠置小学校でのうたとおはなしの会	2月
全学行事	オープンキャンパス	8月
	入学式	4月
	卒業式	3月
地域	笠置ちびっこまつり	7月
	各種人権イベントへの出演	11月～翌年3月

1. うたとおはなしの会

うたとおはなしの会は、春（4月）と冬（11月～12月）の年2回、就学前の乳幼児とその保護者を対象とし、人形劇や手遊び、絵本などを親子で楽しむ機会を提供するものである（図2）。2002年から実施しており、2018年4月に30回目の節目を迎えた。初回の参加者はたった2組の家族であったが、参加者は次第に増加し、近年では200人近い応募が集まるようになった（図3）。そのため、2018年4月は130名までの人数制限を行うことにしたが、参加できない方のために追加公演も実施した。2016年には、指導する平井が「京都はぐくみ憲章」実践推進者として表彰され、2018年4月の会は京都新聞にも取り上げられた¹⁾。

うたとおはなしの会は約1時間のプログラム（表3）で、大型人形劇をメインとして、手遊び、パネルシアター、絵本の読み聞かせ、音楽教育専攻の学生の協力による演奏と楽器遊び（図4）、エンディングの歌という盛りだくさんの内容で構成されている。現在のこのような構成は、幅広い年齢の子どもが楽しめること、保護者にも伝えたい内容を含めること、音楽を取り入れること、の3つを軸とし、参加者からの感想を生かして改善を繰り返しながら作り上げてきたものである。2018年4月に実施した第30回のプログラムを表3に示す。なお、今

回は会の終了後に、お菓子の空袋などの廃材を使ったこいのぼり作りのワークショップ（図5）も行った。



図2 うたとおはなしの会の一場面

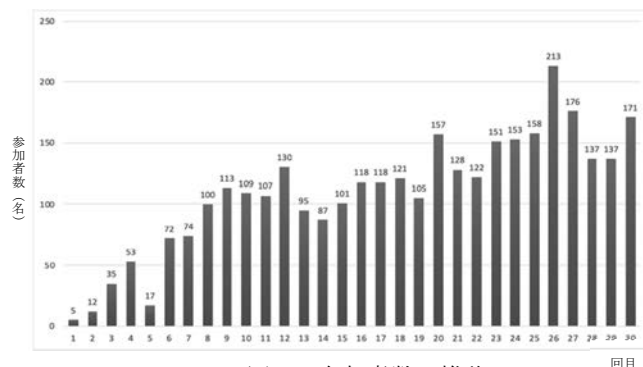


図3 参加者数の推移

表3 第30回のプログラム

No.	プログラム	作品
1	オープニング	ポンポンポンとはるがきた
2	パネルシアター	こいのぼりのかぞく
3	うたあそび	ぱんだ・うさぎ・こあら
4	えほん	だるまちゃんとてんぐちゃん
5	楽器あそび	もりのくまさん、他
6	手あそび	きやべつの中から
7	人形劇	おおかみと7ひきのこやぎ
8	エンディング	にじのむこうに
番外	ワークショップ	こいのぼり作り



図4 音楽教育専攻学生による演奏



図5 こいのぼり作り

うたとおはなしの会は、幼児音楽教育ゼミの学生4～6名が中心となり、3回生の冬と4回生の春に行っている。3(4)回生は教員の指導を受けながら、プログラムの構成や内容、役割分担を考え、それぞれについて練習を重ねる。人形劇に使用する人形の制作はプロに発注するが、それ以外の大道具や小道具は学生が手作りする。また、1回生が、4月の入学直後から運営のサポートを行う。1回生が担当するのは、参加者に配るお土産作り、会場の準備、舞台の設営、当日の参加者の案内、受付、進行上の補助（大道具の出し入れ、子どもへの楽器の配布など）、エンディングの歌の発表、ワークショップ（造形コーナー）の準備・運営である。1回生への説明や指導は3(4)回生が行っている。

2. えほんのもり

えほんのもりは、月2回、附属図書館の絵本コーナーで実施している乳幼児とその保護者向けの絵本の読み聞かせである（図6）。3冊の絵本（または紙芝居）の読み聞かせと、歌や手遊びを含む15分程度のプログラムであり、最後に、廃材などを利用して作ったお土産（図7）を参加した子どもにプレゼントしている。また、スタンプカードを用意し、参加するとスタンプが押されるようになっている。参加者数は、1回につき1～7組とあまり多くはないが、何度も繰り返し訪れる親子もいる。2013年から月1回実施してきたが、2018年度は月2回に増やし、前期（5月～8月）は「言葉（保）」を受講する他専攻の学生が担当し、幼児教育専攻の3回生がその指導にあたることにした。後期（9月から翌年の3月まで）は、1回生が3人ずつのグループに分かれて順番に

担当する。担当する学生は、季節に応じた絵本（紙芝居）を選んで読み聞かせの練習をし、案内のポスター（図8）とお土産を考えて作る。導入や、絵本と絵本の間のつなぎに行うお話や手遊びも考えて練習する。会場の絵本コーナーの窓や壁に、季節にあった壁面構成を行うことも、担当者の役割である。



図6 えほんのりの様子



図7 手作りのお土産



図8 えほんのりポスター

3. 附属幼稚園でのミュージカル上演

毎年7月、附属幼稚園の1学期の終業式の時期に、9月に実習を控えた3回生が、園児と保護者の前でミュージカル（ブラックシアター）を上演している。これは附属幼稚園の育友会の企画として行われており、学生にとっては、実習の前に園児や保護者に自分たちのことを知ってもらい、親睦を深める機会ともなっている。ミュージカルだけでなく、その前後には工夫を凝らしたダンス、全学年の園児と一緒に楽しめる手遊び、エンディングの歌も用意する。5月ごろから学生が相談して題材や配役を決め、「音楽教育指導法」の授業で指導を受けながら、授業外の時間にも集まってミュージカルや歌、ダンスの練習を行う。舞台の大道具や小道具も、すべて学生が手作りする。

2018年度の「ブラックファンタジー 美女と野獣」では、専用の蛍光塗料で段ボールに描かれた主人公のベルと野獣や、登場人物、小道具などが、暗闇の中で音楽に合わせて現われたり消えたり、目まぐるしく動き回ったりする様子（図9）に、園児と保護者から歓声が上がった。保護者へのアンケートでは、「大人の私達でもワクワクするようないしけが次々に飛び出し、びっくりしました。学生さんの技量も素晴らしいと思いました」、「若いエネルギーあふれる華やかでパワフルなステージでした。メリハリがあり、子どもをあきさせない内容は、驚きの連続でした。後ろからは子どもたちの表情は見ることはできなかったですが、さぞかし興味津々に表情豊かに見ていたことと思います」のような感想が見られた。



図9 「美女と野獣」の一場面

保護者アンケートには、ステージに対する評価だけでなく、「今日の本番を迎えるまでにたくさんの時間を使って、準備、練習をして下さったことに感謝します」という学生への感謝の思いや、「子どもたちがどうしたら喜んでくれるかなあ」ということを一生懸命考えることが子どもたちのためになると思って、これからの実習もがんばって下さい」、「こんなに頑張り切れる学生さん達と9月から一緒に遊べるのは、子供達にとっても大きな喜びになることと思います」など、実習に向けての励ましの言葉も記されていた。また、「ステージの中で、大人数で協力して、ステージを作り上げる姿を子供達も見ることができて、お友達と仲良く何かを協力してすることが出来る事はとても楽しくすばらしい事だと感じてくれたのではないかと考えます。親も他の親と協力する大切さを考えたいと切に考えました」のように、ステージの出来栄ではなく、学生が協力して懸命に取り組む姿それ自体が、子どもや保護者に印象を与えているというコメントもあった。

4. 地域の保育所・小学校の幼児・児童に向けたイベント

(1) 特別支援学校の児童との交流

毎年12月に、附属特別支援学校小学部の児童を対象に、幼児音楽ゼミの4回生と1回生全員が、人形劇とトーンチャイム演奏、季節の手遊びや歌遊びなどを行っている(図10)。「うたとおはなしの会」を見学した小学部の教諭の一人が、プログラム内容が幼児向けであり、音楽をたくさん使っていることから、言語や知的な面で理解が難しい児童でも十分に楽しめると考え、2005年から年に1回の交流が始まった²⁾。支援学校の児童は、音楽を身体全体で楽しんだり喜びを声や表情として表出したりするなどの反応を見せるが、そうした反応をうまく引き出すために、ここ数年は大学教員と支援学校小学部教員が事前に打ち合わせを行い、学生に演技上工夫してほしい点(児童の発声を促すこと、物語の一部に児童が参加する部分は特にわかりやすく指示を出すことなど)を確認している。このような打ち合わせを経て事前に指示を与えることで、演目の中での学生と児童とのコミュニケーションがよりスムーズに行われるようになった。



図10 特別支援学校の児童の前でトーンチャイム



図11 墨染保育所の園児の前で歌う学生

(2) 墨染保育所でのクリスマスイベント

墨染保育所でも、毎年12月に3回生が保育所を訪問し、クリスマスイベントを行っている(図11)。墨染保育所と本学幼児教育科は、2003年ごろから保育補助の学生アルバイトなどを通じて交流があった。2006年に「幼児の人形劇鑑賞」をテーマに卒業研究に取り組んだ学生が墨染保育所をフィールドにしていたことをきっかけに、主にクリスマスの時期に、園児を対象にしたイベント開催を依頼されるようになった。プログラムは、サンタに扮した男子学生が登場し子どもたちにプレゼントをわたすシーンから始まり、クリスマスソングの合唱、人形劇やパネルシアターの鑑賞、子どもたちも参加する楽器遊びなどから構成されている。

(3) 笠置小学校でのうたとおはなしの会

幼児教育科教員(平井)が京都府笠置町との「1まち1キャンパス事業」に参加していることから、2018年2月に幼児音楽ゼミの3回生5名が笠置小学校に招かれ、冬のうたとおはなしの会で行った人形劇「さるかに合戦」をはじめ、歌や手遊び、パネルシアターを含む約50分間のプログラムを、小学校の全学年の児童と近隣の保育所の年長児に向けて行った。児童からの感想には「またみたいとおもいました。きょうときょういくだいがくに

もいきたいとおもいました」(1年生)、「人形が本当に生きているようで動かすのが上手だなと思いました。またきかいがあれば笠置小学校に来てください」(6年生)などと書かれていた。

5. 学内行事での取り組み

(1) オープンキャンパス

8月に行われるオープンキャンパスは、幼児教育専攻の学生は原則、全員参加とし、学年を超えて協力しながら準備や運営を行っている。4回生数名が中心となり、各学年から写真を集めて「学生生活紹介」のスライドを作成し、各学年の代表が高校生に向けて話をする。また3回生が、7月に附属幼稚園で行ったミュージカルの一部を参加者の前で演じる。100名近くにも及ぶ参加者に渡すお土産は、全学年の学生が分担して作成する。そのほか、会場準備や壁面構成、当日の受付や案内、学科教員が行う模擬授業の補助、高校生との交流や質問への回答なども、4回生の指揮のもと、各学年で分担して学生が行っている。

(2) 入学式および卒業式

全学の入学式の終了後に、毎年専攻で会を催している。新2回生が会場の飾り付けを行い、新入生のために手作りの名札を用意し、当日は歓迎の歌を披露する。卒業式も同様に、全学の式典の終了後に会を設けている。ここでは3回生が中心となって会場準備を行い、最後に歌で卒業生を送り出す。こうした行事も、幼児教育科らしい趣向を凝らし、学習の成果を発揮する場にするとともに、学生同士の縦のつながりを作り出す機会にしている。

6. 地域との連携・交流

(1) 笠置ちびっこまつり

4.(3)で述べたように、笠置町および笠置小学校との交流・連携を重ねてきたことから、2018年度は、7月に町で行われた「ちびっこまつり」に1回生6名が参加し、小学生と保育園児30名の前で人形劇(4月のうたとおはなしの会で4回生が演じたもの)とパネルシアターを上演した。学生はその後、人形を子どもたちに触ってもらったり、一緒に記念撮影をしたりして交流を深めた。

(2) 各種人権イベントへの出演

2014年に、京都府人権啓発推進室から、児童を対象とした人権絵本の制作について依頼を受け、美術領域専攻の学生が制作した絵本の監修を平井が行った。その絵本「ともだち」のお披露目が附属京都小中学校3年生の児童を対象に開催された折、幼児教育専攻の学生が賛助出演したことをきっかけに、人権啓発推進室から子ども向け人権イベントへの出演を依頼されるようになり、幼児教育専攻の学生が、人形劇やパネルシアターを通して、子どもたちが楽しみながら人権について考えるきっかけとなる教材を提供する機会が増えていった。

当時、京都府が主催する人権イベントでは、イメージソング「世界がひとつの家族のように」^{注2)}を参加者全員で歌い、その歌を通じて人権意識を広げていく試みがなされていた。この歌はクラシック調の美しい旋律が特徴で、小学校高学年では合唱曲としても歌われていたが、幼児や低学年の児童には、歌詞の内容を理解することが難しかった。そこで、幼い子どもも歌いやすいイメージソングが必要ではないかと平井が提案し、作詞家、作曲家、京都市出身音楽グループの協力のもと、新しいイメージソング「えがおのおくりもの」が完成した。「えがおのおくりもの」には、幼児に楽しんで繰り返し聞いてもらえるように、幼児音楽ゼミの学生が考案した振り付けがついている。この歌と振り付けは、2016年10月に太陽が丘運動公園にて開催された「城南地区園児大会」^{注3)}で披露され、1600人の園児や関係教職員、さらには京都府知事も参加し、大いに盛り上がった。この後、「えがおのおくりもの」は、京都府内の多くの幼稚園や保育所、小学校にも広まっていった。

2017年には音楽教育ゼミの学生が「えがおのおくりもの」の紙芝居を制作し、翌年に京都教育大学附属幼稚園と泉山幼稚園の子どもたちに披露した。紙芝居の完成により、「えがおのおくりもの」は、音楽とダンスに加え、お話を通じて子どもたちにより親しまれるようになった。学生は、人権啓発イベントに参加することを通じて、ダンスや絵画制作といったそれぞれの特技や技術を生かしながら、教材開発にも主体的に関わっている。

以下は、2017年から2018年に、幼児教育専攻の学生が出演した人権啓発イベントである(カッコ内は参加した学生の人数)。2017年は、イオン洛南店における「人権啓発イベント」(8名)、山科合同福祉センターにおける「やったね!秋まつり」(7名)、京都府立植物園における「あすKYOフェスタ」(8名)、京都テルサにおけ

る「ガールスカウトフェスタ」(3名)、2018年は、イオン高の原における「人権啓発イベント」(5名)、木津川運動公園における「スプリングフェスタ」(4名)、幼稚園でのイベントとして京都教育大学附属幼稚園(4名)、泉山幼稚園(4名)、「ハートフルコンサート」(5名)、「世界人権宣言70周年記念 京都ヒューマンフェスタ2018」のオープニング(3名)、府立植物園における「あす KYO フェスタ」(5名)。

Ⅲ. 学生の学び

Ⅱで述べた取り組みの一部では、学生に、振り返りレポート(シート)の提出を求めている。レポートの記述をもとに、こうした活動を通して学生にどのような学びが生まれているかを検討する。

1. うたとおはなしの会

うたとおはなしの会は、前述のように、100名を超える参加者の前で演じたり、小さな子どもから保護者まで楽しんでもらえるような内容や構成を考えて準備をしたりする必要がある。中心となる人形劇のテーマは教員が決定するが、3(4)回生はその他のプログラムの題材の選択から、演じ方の工夫、サポートする1回生への指導などをすべて自分たちで行うことになる。実際の保育現場でも、毎月のお誕生日会や季節の行事などで、保育者が園児を楽しませるプログラムを実施することがあるが、そのために必要な総合的な実践力を身につけることにつながっていると思われる。

1回生は、振り返りシートに、子どもたちの様子を見て気づいたこと、先輩たちの演技を見て感じたことなどを書いている。その記述をみると、「ひとりひとりが楽器を持った時は、ほぼ全員が楽しそうに演奏して、意欲的に参加していた」、「手遊びは同じでも、速さを調節するだけで、子どもたちがどんどん引き込まれているのが分かった」、「子どもも1人1人感じ方や思うことが違うということが感じられたし、『いろいろな子がいる』ということを通して頭に入れておく必要があるなと思った」、「舞台だけでなく会場全体を使うことが大切だと分かったし、そうすることで、飽きたり(舞台から)遠い子どもたちがおもしろくなくなったりするのを防げると分かった」、「子どもたちがプログラムを楽しむだけでなく、お母さんお父さんと一緒に過ごす時間を楽しんでいるように感じて、親子がゆっくりとできる環境の大切さを感じた」など、乳幼児の姿や手遊び等の技術から会場の使い方や場の持つ意味まで、さまざまな面での気づきがあったことがうかがえる。また、「ワークショップでは、年齢によって自分でできる範囲が違っていて、どこまで補助したらよいかの判断が難しかった」、「最初の受け付けではお母さんの後ろに隠れてしまっていた子も、帰りのおみやげを渡すときになるとあちらから寄ってきてくれたり、『楽しかった?』という質問に笑顔を見せてくれたりもした」のように、まだ慣れない子どもとの関わり方に戸惑いつつ、手応えも感じている様子が伝わってくる。先輩の様子については、「子どもたちにわかりやすい言葉で、笑顔で、聞きとりやすくすることを、自分がやるときは気をつけようと、先輩方が練習してらっしゃる姿や本番を見て感じました」、「とても立派な劇やパネルシアターを、少人数で、何も恥ずかしがることなく堂々と明るく披露している姿を見て、私もあんなふうになりたいと思った」など、数年後に自分がこうありたいという具体的な目標を意識する機会になっていることがわかる。このように、複数の学年が共に取り組むことで、通常の講義では得られない学びが生まれている。

2. えほんのもり

幼児教育専攻の学生は、1回生の9月からえほんのもりに携わることになる。参加者数は多くないとはいえ、各自が責任を持って子どもの前に出て絵本を読んだり、話をしたりしなければならない。小さい子どもや保護者への関わりにも少しずつ慣れることができるため、3回生以降に大人数の前で実践するためのよい準備段階になっていると思われる。実施後の振り返りシートでは、「準備はだいぶ前から取り組んだが、本番の段取りをもっと綿密に考えるべきだと感じた」、「複数の子に一気に目を向けるのが難しく、気づけば一人の子とだけ向きあうというようになってしまったので、次回から心がけたい」など、子どもたちの反応や一緒に担当する他の学生の姿からさまざまなことを学び、自らを客観的に振り返って課題を見出していることがわかる。

3回生で再び関わる際は、1回生の時の経験をもとに、他専攻の学生の指導とサポートをすることになる。準備段階で絵本選びや手あそび、作るお土産についてアドバイスをするほか、当日はビデオ撮影しながら観察を行

う。ピアレビューシートには、「本と本との間をもっと充実させる（手あそびで関連づけたり、すこしおはなしをする）ともっとたのしく集中しつづけてもらえると思った」、「何歳の子が来るか分からないので、3人が長さやテイストのバラバラの本をえらぶとよいと思う」のように、自らの経験を生かした具体的なアドバイスが書かれていた。

3. 附属幼稚園でのミュージカル上演

20名近い学生全員で協力し、ミュージカルを一から、しかも短期間で作り上げるのは容易ではない。特に2018年度の3回生が取り組んだブラックシアターは、観客にどのように見えているかが演じている側にわかりづらいため、動画を撮って見返しては動きを工夫したり、道具に手を加えたりしながら、何度も練習を繰り返す必要があった。また、同じ学年の学生同士とはいえ、全員が予定を合わせることが難しく、思ったように準備が進まなかったり、トラブルや葛藤を経験したりもする。こうした経験も、学生の学びにつながっていると考えられる。

学生は事後学習として、前述の保護者アンケートに目を通し、各自で振り返りレポートを作成した。用意された設問は、①自身の役割と貢献について、②ブラックシアターという教材のおもしろさと幼児への教育的効果について、③演技上、難しいと感じた点およびその改善のための試行や努力、④その他活動全体を振り返って感じたこと、の4つであった。多くの学生がA4用紙いっぱいびっしりと書き込んでいることから、学生の学びの深さが読み取れる。以下、レポートの記述をもとに、実践を通して学生が学んだことを、教材についての学び、仲間と協力して進めることについての学び、保育実践につながる学び、の三つに分けて述べる。

(1) ブラックシアターという教材についての学び

ブラックシアターという教材のもつおもしろさと幼児への教育的効果について、学生は実際に演じることを通して理解を深めていた。学生が挙げている内容は、①絵が突然現れたり消えたり、空中に浮かんでいるように見えたりするなどの意外性と驚き、②暗くすることによる非日常感、および③物語の世界に入り込みやすいこと、④なぜ光るのかという仕組みに対する科学的な関心を引き出せること、⑤演者が言葉を発したり、場面や気持ちを言葉で説明したりしないことによって想像力をかきたてられること、の5点にまとめられる。

以下、具体的なレポートの記述例を紹介する。「パッと現れパッと消え、まるで空中に浮かんでいるように見えることである。この演出ができることで、空を飛ぶ様子や魔法のような表現が可能になる」、「急に予想もしない場所から絵があらわれるなど、常に驚きがあること、また、黒い部分は何も見えないことを活かした絵の動かし方や見せ方が様々であること。絵本と違い、絵が動き音楽があるので、よりその世界観を感じられ、また暗くなるとなりの子ども自分ですえも見えなくなるので、よりその世界に入ったかのような感覚を味わうことができる」、「舞台をまっくらにして行う非日常感。まっくらな中に浮かびあがる絵は不思議さを感じさせ、幼児をひきこむことが出来るのだろう。どうして光っているのだろうと、科学的な面の興味・関心につながるのではないかと考える」、「音（音楽）や動きだけで、その状況やその登場人物の気持ちを伝えることが出来ること（中略）。子どもたちは目で見たものと耳で聞いたことから、そのストーリーを想像していくので、想像力がきたえられたり、感性が豊かになることが期待できる」。実際に演じ、子どもたちの反応を目の当たりにすることで、教材について多角的に考察することができるようになっていっていることがわかる。

また、このような教材の特徴を生かす演じ方についても、実際に演じてみて互いに見合い問題点を改善するという繰り返しの中で、いろいろな気づきがあったことがレポートの記述からわかる。その内容は、①登場人物の特徴やストーリーが伝わるように動かし方を工夫し、バリエーションを多様にすること、②音楽に合わせて動かすこと、③仲間と動きを合わせること、④全体としての見え方を考えて、高さや位置を細かく調整すること、の4点にまとめることができる。

具体的な記述内容は以下の通りである。「今回の歌詞は、少し難しい言葉もあって、年齢の低い子どもやストーリーを知らない子どもには分かりにくいのではと少し思っていたのですが、実際にしてみて、そして保護者の方の感想を見せて頂いて、子どもにとって歌詞はあまり重要ではなく、音楽と動きが調和しているか、動きを通してキャラクターの感情や行動、場面の雰囲気や伝えられるかが大切であり、そのためには動きのバリエーションが多様である方がよく、それによって表現の幅が広がると思いました」、「音楽の曲調やテンポ、歌詞に合うような動きのパターンを色々考えることが難しいと感じた。横に揺れる、消えて現れるという動きが多くなってし

まい、見飽きてしまうのではないかと、またそれぞれのキャラクターの特徴があまり表せていないのではないかと考えた。皆で話し合い、ベルと野獣が踊っているような動き、チップがびよんぴよん跳ねている動きなど、ストーリーをイメージして動きを考えていった、「動かす私たちが話して物語を伝えたりすることができないため、動きで楽しませなければならない。ある程度動きを決めていても、映像をみるとゆれているだけで単調になってしまっているように感じるのが何度もあった。これを改善するために、曲を何度も聞き、歌詞やリズムにあわせて動き方を変えていく工夫をした（中略）。さらに、動きの練習をする中で、段ボールの重さで持ち手が折れてきてしまったり、うしろに影がかかってしまうことがあった。改善するために不要な部分を切り取るなどして軽く、スマートにした」、「ブラックシアターを見せる上で、見せる高さや角度を少し変えるだけで、見える印象が全然変わってしまうことや、みんなが息を合わせて出すタイミング、消すタイミングをそろえる難しさを感じた。やっている側だけではわからないことが多いので、手が空いている人がお客さん目線になって、前から座って見て、指摘したり、構成上さみしい所や物足りないところが見つければ装飾品を足したりした」。こうした記述から、学生が試行錯誤しながらよりよい表現のしかたを追求していった様子を見て取ることができる。

(2) 計画的に進めること、仲間と協力することについての学び

公演は成功といってもよい出来であったが、20名中6名の学生が、計画的に進め、もっと準備をしておくべきであったということを見省点として挙げていた。「何となく今日はこれをしようと準備を進めるのではなく、最初に細かく、何日まで、どこまで進めておこうと決め、全員で共有できるようにしておくことよりスムーズに進めることができたのではと思った。私個人としては中心となる人たちに任せてしまっていることが多かったことが反省点である。どうしたらいいかわからないからやらないのではなく、もっと積極的に意見をだし、参加していくべきだったと思う」。計画的に進めることが難しかった原因の一つに、20名という人数の多さがあった。「20人で集団で一つのものを作り上げていくので、うまく役割分担ができなかったり、個人個人でも生活の忙しさがちがうので、まとまって協力しながら作り上げることが難しかった」、「準備～本番までの練習時間の中で人との協力が本当に大切だと思った」。このように、協力することの難しさや大切さについて言及した者が5名いた。

ただ、そのような葛藤を経験し、反省することを通して、その後に取り組む3週間の実習と一緒に乗り越えるための仲間づくり、協力し合える雰囲気づくりが可能になったと考えられる。そうした経験は、他では得難いものであり、卒業後の生活にも活きるものであると捉えている学生もいる。「この機会に全員で団結して何か一つのことを成し遂げたことで、前よりもきずなを深めることができたと思う」、「一から作り上げていくことの大変さ、協力していくことの大切さを学べた時間であった。この20人でできて良かった」、「何か一つの目標に向けて大勢が協力することは学生のうちにしかできないことだと思うので、この発表会は素晴らしい思い出になりました」、「20人以上という大人数をまとめることの難しさ、大きな1つのものを作り上げる経験などどれも私たちのこれからの教師生活に生きてくると思います」。

(3) 保育実践につながる学び

2名ではあるが、ブラックシアターを演じて得た学びを、これから取り組む保育実践と結びつけて捉えている学生もいた。「子どもたちをうまく世界に引き込むための一言や目線ひとつが本当に重要で、そのような点に関しては日常の保育でも共通する点が多くあると思った」、「今回初めて、子供達のために公演を一から自分たちで創ってみて、子どもたちを楽しませこちらの世界に引き込むには、作品を創っていく段階で『子ども目線』になって、自分で確認しながら、ああでもないこうでもない工夫を積み重ねていくことが重要だと感じました」。

4. 笠置小学校でのうたとおはなしの会

これまで見てきたように、学生が取り組む活動の多くは乳幼児（とその保護者）を対象とするものであるが、笠置小学校では、保育所の年長児から小学校6年生まで幅広い年齢の児童の前で演じるため、学生は特有の難しさを感じるようになった。学生の実施後の感想には、「パネルシアターや手遊びはやはり少し対象年齢が低すぎたかなと思う。また、私たちの話し方も園児向けであり小学生には不向きであったかもしれないと思った。見る人に合わせて臨機応変に対応できたらよかったかなと思う」、「低学年の児童はパネルシアターでの発問に答えてくれたり、手遊びも楽しんでくれたりという様子が見られた。逆に高学年の児童にとって手遊びやパネルシアターに積極的に参加する様子はあまりみられず、私たちの用意したものが低年齢向けすぎたように思

う」、「小学生の流行りや興味を持つこと、できることをもっと入念に調べ、演目を決めることでもっと良い発表ができたのではないかと思う」のような記述が見られた。

学外の会場で実施するため、道具を運び、会場に合わせて舞台を作らなければならないことも、学生にとっては新たな経験であった。「公演場所に合わせて自分たちで舞台転換などができるように工夫することができてよかった」という感想も見られ、臨機応変に対応できたという経験が、自信につながっていることがうかがえる。

IV. 本プログラムの意義と今後の課題

最後に、本稿で紹介してきた育成プログラムの意義と課題について述べる。

現在のプログラムの意義として、以下の3点が挙げられる。第1に、4年間で多くのさまざまな活動を経験することができる。またその内容は、1回生での先輩のサポートやえほんのもりから、3回生での1つの学年全体で協力してミュージカルを作り上げる経験を経て、3回生後期からの下級生の指導も含めた大きな会の運営へと、次第に周辺的な役割から中心的な役割を担っていくような構成になっている。こうしたプロセスはまさに正統的周辺参加³⁾といえるだろう。第2に、どの活動も、歌や楽器演奏などの音楽表現、手遊びやダンスなどの身体表現、絵本の読み聞かせや子どもへの語りかけなどの言語表現、ポスターやお土産作り、大道具制作などの造形表現と、すべての表現分野を含むものとなっている。第3に、多様な実践の場が用意されているため、学生は乳幼児だけでなく、小学生、保護者、地域住民など幅広い観客の前で演じる経験をすることができる。さらに、こうした多様な実践に学生が参加することは、本学と教育現場、地域との結びつきを深めることにもつながっている。

ただし、現在のプログラムには課題もある。第1に、図1を見ると明らかなように、2回生での活動がほとんどない。2回生は必修の授業が多く、課外活動の時間の確保が難しいことが大きな要因であるが、1回生からの経験を中断させないためにも、学生に無理のない範囲でいかに経験を積み重ねるかを考えていく必要がある。第2に、1回生でのうたとおはなしの会、えほんのもり、3回生での附属幼稚園でのミュージカル上演、保育所でのクリスマスイベント、オープンキャンパスは学生全員が経験するが、本プログラムで主要な位置を占めるうたとおはなしの会の運営については、現在までのところ幼児音楽教育ゼミの学生に限られてしまっている。関心や意欲のある学生が、ゼミの枠を越えて取り組めるような仕組みを考えていく必要がある。第3に、3回生が初めて担当する冬のうたとおはなしの会が、4回生が卒業研究で忙しい時期と重なっているため、学生間の引き継ぎがうまくできていない。その結果、教員がすべてを指導しなければならず、負担がかなり大きくなっている。学科で行っている取組みを、学生主体のものにするためにどうすればよいか、考えていく必要がある。

注

- 1) 科目名称は、2018年度時点のものである。
- 2) 鮎川めぐみ/作詞・千住明/作曲、詳細は<http://www.jinendo.co.jp/sekaigahitotsunokazoku/>を参照のこと。
- 3) 京都府私立幼稚園連盟の城南地区（宇治市、城陽市、八幡市、京田辺市、木津川市、精華町、宇治田原町）の幼稚園の合同の運動会。

文 献

- 1) 京都新聞「京大付属図書館 乳幼児向け『うたとおはなしの会』 学生手作り 好評 30回」 2018年4月26日付朝刊。
- 2) 中川宣子・中島有扶子・平井恭子 (2010). 幼児教育専攻学生による音楽的活動の取り組み：特別支援学校小学部での実践, 京都教育大学教育実践研究紀要, (10), 163-172.
- 3) Lave, J. & Wenger, E. (1991). *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge: Cambridge University Press. (佐伯胖訳 (1993) 状況に埋め込まれた学習. 産業図書)